運命の女神

広瀬 ナチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
運命の女神

【Ｎコード】
Ｎ２１５６Ｏ

【作者名】
広瀬　ナチ

【あらすじ】
一人は多重転生者、もう一人はプリーモの転生者。
ただ見守ってるだけと決めたのに、なぜか関わってしまった。

どんなことが起きても、きみの手は掴まないよ……。

ゼロ（前書き）

設定

眠る少女（ヒロイン）、紫苑（しおん）

元、プリーモのメイドで護衛。プリーモに好意を持ってたが諦めた

次第に病に侵されてく

色々な謎を持っている

少し嘘つきなところがある

プリーモの生まれ変わり　秋人（あきひと）

見た目や多少の記憶を秋人は受け継いでいるが、完璧オリジナルキャラ

ゼロ

時々、この世界について悩むときがある。
なんで、私はここにいるんだろうって……。
どうして、夢のような世界が私の中で作られたんだろうって……。
記憶が作られ、世界が作られ、想いが作られ、未来を作る。
今日もまた、同じように世界を進むための道を歩む彼を見てるだけ……。
だけど、少しのカギによって、彼の未来は変わった。
小さいけど確実な気配。
何かを探るように、研ぎ澄まされた鋭い殺気。
それは私に向けてのものじゃないと分かりつつも、体を硬直させてしまう。
何でか見てるだけのせいか、人の気配や身に纏うオーラに敏感になった気がする。
……とにかく、彼の物語が始まったのは事実で、たまに小さな気配が学校に来ることもしばしば。

「紫苑ちゃん！　おはよー」
「お、おはようございます。笹川さん」
「う、うん……」

私は必要以上に接触はしなかった。
命が関わるのは嫌だし、しかも、マフィアだなんて命どころじゃ無いような気がする。
気配に敏感だとしても、戦闘能力も地に等しいくらいに皆無。
笹川さんの険しい表情は、あの花のような可憐な笑顔を壊していた。

意味が分からず、首を横に傾ければ、案の定、名前で呼んでほしいと言う。

「……ごめんなさい。あの、ごめんなさい」

「……あ、ううん。私こそごめんね？　無理に……言っちゃって……」

笹川さんの悲しく歪んだ表情に、心臓が締め付けられるように痛んだ。

私だって名前で呼びたい。でも、関わることが怖いの……。

だから、クラスメート、いや、この並盛全員を名前で呼ぶことはしないって決めたの。

メインじゃなくても、彼に関わった人だけじゃなくても……ね。

私がこの世界に来たのは、よくある死後トリップってところだ。

私は元の世界で、同じ名前で、同じ両親の元で生まれ、何も変わらない日常を過ごし、恋人もいて、社会人にもなった。

あること以外は、退屈な日常で、変化を望んでいた。

そのあることは、勿論、家庭教師ＲＥＢＯＲＮ！である。アニメも終了しちゃって、暇人化とした私は生き甲斐って何だろって思ってた。

新しくなったリングを近くのレンタル店で見付けて、運試しってところもあって、二百円を出して買ってみると彼のリングだった。

「なんだか縁があるのかな？　ほとんど彼のだし……。それに……

……まさかね」

リングや匣のほとんどが彼のモノだった。

もちろん別なのも当たったりはするから、そんなバカげた考えは消滅した。
リングを指に装着して、帰ろうとした時、体が動かなかった。
道路の真ん中、たくさんのクラクション音、悲鳴、衝突音、何かを引きずるような音、そして……全てが無音となった。

どこまで記憶があったのか分からない。
いや、記憶が無い方が幸せだったかもしれない。
思い出せない方が良かったかもしれない。
あれのせいで、私は乗用車に恐怖心を抱いてる。
乗り物嫌いになってしまった。
どんなに頑張っても、体があの恐怖を忘れてなくて、ボロボロと涙を流しながら体が冷える。
震えるのが嫌と言うほど分かって、苦しかった。

「きゃー！」
「え……、ぁ」

女の子たちの悲鳴に驚き顔を上げれば、銀髪の男の子が態度悪くそこに立っていた。
やば……、気付いてなかった。
まさか、獄寺くんが来ると思わなかった。
時間的に知らないとは言え、やっぱりアニメとかそういうの全然違う。
リアルな人の気配、空気、体温、呼吸、全てが現実なんだと思わせる。
「……最悪だ。同じクラスってだけで危ないのに」

なに巻き込まれてんのよ……。
周りもなんで気付かなかったんだろう？
沢田くんの椅子を蹴られた。
容赦なく蹴ってるの、いつか後悔しないのかな？
沢田くんも顔が青ざめてるし……。

「……？」

何だか一瞬、沢田くんが私の方を見た？
あ、いや、その視線の間に笹川さんがいたからだろう。

「何だか、面倒なことになりそう……」

頭痛が酷くなりそうだ……。

イチ

時計の針の音が異様に強く鳴り響いていた。

「なんだか騒々しいけど、なに？　尾田」

「……え、えーっと、その……」

「さっさと答えなよ」

「……あの、根津銅八郎っていう教師いますよね？　その方が引金で、その人がうちのクラスメートを退学にすると言い出したんです。それで、退学を無くす代わりに、あの、校庭にあるはずのタイムカプセルを探せと言うんです」

「校庭に？」

確かに、校庭に埋めること自体、不思議なことだけど……。

でも、前に校庭に埋めていたんだと言ってたから事実なんだろうが、どうも私は校庭に埋めることに疑問を持ってしまった。

「まぁ、どちらにしても学校を荒らすなら咬み殺すよ…」

「……一応、注意しときます。委員長」

なぜ、私と雲雀さんが知り合いなのかと言うと、不幸なことにうちの近くに雲雀邸があり、しかも私が群れてないとの理由で無理矢理、並盛風紀委員書記係にされてしまった。

でも、裏側的立場で、本職は図書委員だったりする。

あまり委員会会議に出ることが無いから、名前だけってところ。

贔屓されてるように思われるが、私も咬み殺されてること数百回……。

青タンが消えたことは無かったりする。

「はぁ……、絶対に咬み殺される」
関わることも嫌だけど、それでも痛いのはもっと嫌だし……。
ヒントくらいはあげても、良いよね。

頭を抱えて歩いてる沢田くんがいた。
なんだか、ボソボソと話してる。
どうやら、タイムカプセルがどこにあるのか分からないようだ。
超直感、かな？　校庭にあるかどうか疑ってるのかもしれない。

「……沢田くん」
「え？　あ、し……、尾田さん」
「し？」
「な、何でもない！！」

し、ってなんだ？　何なんだ？　新たなキーワードか？　私は危険な目に遭わされるのか！？

「どうしたの……？」
「あー、タイムカプセル……何年か前に……中庭に変わったらしいですよ」
「え、なんで俺がタイムカプセルを探してるの知ってるの？」
「……ぁ、いや、さっきボソボソと話してましたから」
「そっか……」

な、なんで？　居心地の悪い空気になるの？
私ＫＹだった？　ねぇ、私が悪いの？　なんなの？

「ありがとう、尾田さん」
「……うん、では」
「あ、待って！」
「……」
「……その」

沢田くんが下を向いたまま躊躇ったような顔をしている。
なんで……？

「覚えて……ない？　全く？」
「え？　なに？」
「……！　覚えて無いなら良いんだ」

いや、いやいや……何なの？　何が言いたいの？　何があるの？
ねぇ、これって私が悪いの？
落ち着け！　いくら私が予想外に焦ったとしても、それは結局、何にも変わらない。

「……ありがとう、教えてくれて……紫苑ちゃん」

最後が小さくて聞き取れなかったし、走り出したのだけど、今、名前で呼ばれた？

「え？　そんなフラグ立ってた？　え？　やば、ヤバイんじゃなか！？　あ、噛んだ……いてっ」

焦りすぎて舌を噛んでしまった。

ヒリヒリとする痛みに、壁に背を付け座り込んだ。
いやいや、認めないから！　こんな辺鄙なフラグは認めないから！！

「あ、根津だ」

私あいつ嫌いなんだよね。だから一言文句を言わないと気がすまない。
階段を降りて中庭に行くと、その後ろ姿が見えた。

「根津…先生」
「なんだ？　尾田か…」
「嘘つきは、いけませんよね？」
「当たり前だ！」
「……そう、ですか。あ、沢田くん」
「死ぬ気でタイムカプセルを探し出す！！」

なんだか騒々しい中庭に背を向けて歩き出した。

「……え？」

今、二階の窓から金色の太陽のような髪が見えた。
この世界で金色は三人しか記憶にない。
一人はディーノさん、もう一人はベル。
この二人は、イタリアにいるし、まだ出るはずがない。
あとは、プリーモ？　まさか、だって彼はこの時代にいるわけない。
気のせいか……、ただの不良かもしれない。

変に気を使いすぎなのかもしれない。

「尾田！」
「は、はい！」
「なに？　これ……」
「あ、さっき話したことで……。根津が経歴詐称で」
「そんなことはどうでも良い」

ど、どうでも？
けっこう重要なことなのに……。
頭が悪いくせに生徒イビリしてるから、腹立たしい。

「あの、お願いします！　根津をどこの学校にも所属出来ないようにしてほしいんです」
「……ふーん、珍しいね、きみがキレてるなんて」
「別にキレては無いです」

ただ、あの理不尽さにはイライラするけど……。
あの男の行動全てが苛つく原因。
マンガを読んでてもムカついていた。

「……」
「何ですか？」
「中庭、修理しといてね」
「え〝」

しゅ、修理って……。
あの広い中庭を？　それに、メインたちがいるじゃん！
文句言ったら咬み殺されるだろうしな……。

「あ……、もう……。あのワガママ王子……ぐはっ」
文句を言ったらトンファーが顔面に飛んできた。
容赦無いし、地獄耳だ……。
いや、それよりも……どうするかな？

何だか、騒がしくなっていたので、どう考えても彼が頑張ったとしか思えない。

「沢田くん」
「あ、尾田さん」

やっぱり気のせいか？　私のこと名前で呼んだの気のせいだよね……。

「ここ片付けてくださいね」
「え？」
「テメー、どういうことだよ！」
「……だからね、中庭、片付けてくれないと困るんです。お願いします、手伝いますから」
「う、うん。分かったよ」

リボーンがいるのは分かってるけど、一般人で通さないといけないし……。
いや、一般人だよ？　でも、こういうのって絶対に関わることになるから……嫌なんだよ。
スコップを片手に、歩くと、沢田くんがやって来た。

「あ、ありがとう。手伝ってくれて……」

ズキズキと心が痛む。だって、命令されて来たのに、お礼を言われる筋合いは無いのに……。

「……そう、ですか」

「あのさ、紫苑ちゃんって呼んで良いかな？」

「……」

まさかのフラグーーーー！？　これって私のせいなの？

関わりたくないのに、ってか、雲雀さんに出会って知り合った時点で終わりか……。

「……勝手にしてください」

「……あ、うん！　紫苑ちゃん」

うぅ、明るい笑顔をされたら何も言えないじゃない。

結局、私って甘いのかな？

「ところで、なんで敬語？」

「……関わりたくないからです」

「え？」

「あなたに関わるとロクなことが無いからです」

「んだとテメー！　黙って聞いてれば！」

「あー！　獄寺くん落ち着いてー！！　紫苑ちゃんも何言ってーー」

「何してるんだ？　綱吉」

ふと聞いたことがあるけど、でも信じがたい声が聞こえた。

「秋人！」

あ、アキヒト……？

そんな人がいたかな？　いや、いないはずだけど……。

でも、声だけ聞こえるだけで、背後にいる誰かのシィンとした空気が痛かった。

振り返ると、まず金色が目に映って、どこをどう見ても沢田くんにしか見えなくて、彼がいること事態が夢のようだった。

「秋人兄さん、どうしたの？」

え、兄さん……？

何のこと？　もしかして、私のいる世界はパラレルワールドってこと？

私は、ふと不安に思い、服の中に隠してる、あの世界の唯一の品であるリングを握りしめていた。

呼吸が乱れるのが分かった。

苦しくなった。痛くなった。怖くなった。

「あ、なんか。タイムカプセルを探しててて荒らした中庭を直すように言われて……」

「あいつか……」

「いや、紫苑ちゃんに……」

「シオン……だと？」

そこで私に初めて気付いたようでこちらを見た。

私は急いで振り返った。秋人という少年から顔を反らした。

「……同級生か？」
「うん。手伝ってくれてて」
「……てっきりアイツかと思ったんだがな」
「アイツ？」
「何でもない。俺も手伝ってやる」
「ありがとう！　秋人」

まさか双子？　兄弟？　どっちなんだろ……。
いや、関わらないって冗談にしか聞こえないよ。

「紫苑だっけ？」
「え、あ、はい……」
「……、名字は？」

振り返って顔が合うと、秋人という少年は驚いたような顔をしていた。

「尾田ですけど…」
「尾田……ねぇ、恭弥のお気に入りか」
「はあ？」

今、この人なに言った？
恭弥って雲雀さんでしょ？
あの人が私を気に入るわけないじゃん。
毎回毎回、咬み殺されてるのに気に入られるわけないよ。

「……っ」
「どうした？」

熱い……。

何だかリングが熱くて痛い……。
みんなから顔を反らして、リングを見ると、ほんのりとリングに炎が灯っていた。
このリングはオモチャだよ？
それに、リングの色は大空の属性だし、何より私に大空の波動があるというの？

ニイ

「……っ、苦しい……」
「紫苑ちゃん！？」
「……痛い」

リングが触れる肌が、皮膚を焼こうとしてるようで痛みを覚えた。

「落ち着け！　心を休ませろ」
「……はぁはぁ」

秋人が私を抱えて背中を撫でる。
まるで、私の扱いを慣れてるかのように……。

「落ち着いて……眠るように」
「……」
「何も考えないで…。死ぬ気モードを解除しなくてはな」
「……死ぬ気……？」
「気にするな」

そうか……、リングから漏れてたのは死ぬ気の炎か……。
あれ？　でも、炎って肉体を燃やせたっけ？

六道くんの槍や、服が焦げてたから、って、もしかしてヤバい！？

……あ、ヤバイ、意識が無くなってきた。
眠い……、どうしよう、今、眠りに就いたら起きれなくなる。

「おやすみ、シオン」
「……」
秋人の手により私の瞼は閉じることになった。
そして、目を開けることが出来なくなりそうだ。

目を覚ますと、見覚えの無い部屋にいた。
眠気が完全に覚めたわけではなく、深く起きれないくらい魂が眠りに就いてるみたいだ。
体は今すぐ起きろと言ってるようだ。

「あら、紫苑ちゃん起きたの？」
「……あの」
「私は、ツッ君とアキ君のお母さんの奈々よ」
「……はぁ」
「アキ君が紫苑ちゃんを連れてきた時驚いたわ！　あ、ごめんなさいね。ご飯が出来たから下に降りられるかしら？」
「はい……」
「母さん、起きたのか……。大丈夫か？」

秋人が来て立ち上がろうとしてよろめいた私を支えてくれた。
お礼を言うと、秋人は何も言わず下に降ろしてくれた。

「あっ、紫苑ちゃん！！　大丈夫？」
「あ、うん」
「さあ、座って」

椅子に座ると目の前にたくさんの料理が並ぶ。

食事の合図をすれば箸を持って料理を摘まむ。

「美味しい……」
「だろ？　シオンは親は？」
「……いない」
「……じゃあ、料理はどうしてんだ？」
「……学校の弁当だけ」
「まあ！！　体に悪いわ！！」
「……家は？」
「学校の近くのアパート」

食事により気分が少し良くなり何でも答えていた。
あー、眠くなってきた。

「あらあら、お目めがくっつきそうね」
「あららのらー、ランボさんより赤ん坊だもんねー」
「ランボ…、シオンは疲れてんだよ」
「あ、もう寝てる」

頭に力が入らず、スッと周りの声だけがしていた。

「ツナ、今日お前のとこで寝るから」
「え？　あ、うん。紫苑ちゃんが秋人のとこで眠るんだね……」
「なに赤くなってる？」
「え？　ち、違っ！！」
「ツナ、変態だぞ」
「リボーンまで！！」
「ツッ君、紫苑ちゃんが眠ってるから静かにね」

騒がしかったのが一瞬で静かになった。

母親の力は偉大だと言うことか……。
いや、それより起きろ私、関わるな！！

「……帰る」
「紫苑ちゃん！？　起きたの？」
「帰る」
「そんな体じゃ無理だ！」
「帰るの！」
「……アキ君、紫苑ちゃんを送ってあげて？」
「あ、俺も行く！」

珍しい。あのダメ吉くんが自ら行くなんて……。
ってか、秋人って良い匂いがする。
あ〝、やばっ、完璧変態発言だ。

「大丈夫か？」

秋人の肩に寄り掛かりながら歩く。
沢田くん一家は比較的、身長は低いのか？
ってか、ずっと疑問に持ってたけど、骸とクロームって指のサイズが一緒なのかな？
だって、変わっても指輪のサイズが変わることは無いだろうし……。
いや、クロームの指が細いから？

「うわ、分からない」
「何がだ？」

「……」
「？」
沢田くん兄弟が不思議そうに私を見てくる。
あー、ここまで関わっちゃって助けてくれて、今さら何も言えないよね。

「あ、ここ」
「中に入るまで見てるから」
「オートロックだっけ？」

沢田くん兄弟は私が中に入るまで見てると言ってくれた。
紳士なその行動に私は嬉しく思った。

「ありがとう、沢田くんたち」
「綱吉！　そう呼んでよ」
「俺も秋人で良い」
「……ありがとう、綱吉、秋人」

薄ら笑いを浮かべ部屋に戻った。
入って、数歩だけ進むと壁に寄りかかるように倒れた。

「……眠い」

目を覚ますことが出来ないような、辛く深い眠りに入った。
起きたくない。起きる方が辛い。

あれから何日経っただろう？
綱吉のクラスに行ってみるが、シオンが来てる様子は無いらしい。
「まさか、倒れてるのか？」
風紀委員たちが校門に鎖を繋げていた。
どう考えても、遅刻者を許さないアイツらしい行動だ。
「秋人、どこに行くの？」
「ったく、すぐに見付けるなよな」
「ワオ、開き直りかい？　分かりやすく立ってるのが悪いんでしょ」
「ちょっと、サボる」
「なんで」
即答で聞いてきたか……。
まあ、人の命が掛かってると言えば、不満げに顔を歪ませる恭弥だが、俺が言ったことに反論は滅多にしない。
「すぐに戻ってくるんでしょ」
「ああ、ちょっと様子を見に行くだけだからな」
「……分かったよ」
俺は門を飛び越えると、近くにあると言うアパートに向かった。
前に来た時は、暗くてあまり見えなかったが、明るい今見ると大きくて高級そうなアパートだと分かる。
いや、アパートよりマンションか……。
チャイムを鳴らしても出る様子がない。
「ったく……」

シオンの隣に住む家のチャイムを鳴らす。

『はい、どなたですか？』

「すみません、隣に住む尾田紫苑の彼氏なんですが、全然、出る様子がなくて不安になったのでカギを開けてもらえますか？」

別の部屋の人でも良いが、開けてもらわないと入れない。

最初は声の主は不思議そうにしていたが、ガチャと音がして扉が開いた。

お礼を言うと、すぐに中に入りエレベーターに乗った。

「……はぁ、住民票を貰っといて助かったな」

マンションの場所が分かったとしてもどの部屋か分からない。

恭弥から並盛の住民票を覚えろと言われてたから、本当に助かった。

チーンとエレベーターが止まり、歩き出した。

ピーンポーンとチャイムを鳴らした。

少し待っていても出てくる気配がない。

ガチャと扉に手をかけると、カギが掛かってなくて簡単に開いた。

中に入り少し歩くと壁に寄り掛かりながら眠っていたシオンがいた。

彼女の肩に手を置いて揺らしても、彼女が目を覚まさない。

「シオン」

「……あき」

「大丈夫か？」
「……ねむ……い」
「俺の家に泊まれよ。おまえ、何にも食ってないだろ」
「……お腹、空く、眠い」
「どうせ、物も無いし、その方が良いだろ」

生活感が全く無くて、住んでるというか、部屋が生きてるような気配がない。
物はある程度、備え付けのものしか無かった。

「とりあえず、俺の家に住めよ」
「……ん」

そうして、またシオンは眠りに就いた。
起きないくらいに深い眠りに入っていた。
シオンを抱えて家に向かった。
居候がまた増えた……な。

小休止（前書き）

物語とは関係ないヒロインたちの会話。

文章もなく、本当の雑談です。

小休止

紫苑
「はろはろー！　ヒロインの尾田紫苑でーす！！」

秋人
「無駄なハイテンションありがとうございます」

紫苑
「テンション低いよー！　王子」

秋人
「誰が王子だ」

？？？
「キャラがおかしいですわ！　紫苑サマ」

紫苑
「だ、だれ！？」

？？？
「あたしは、リング争奪戦で出てきますよ」

紫苑
「まじ？　ってか、物語飛びすぎ」

秋人
「仕方ないさ、白雪姫だったんだから」

???

「で、白雪姫はなんでハイテンションなのかしら？」

紫苑

「ほら、ずっと眠り続けちゃうから、ここではテンション高めにしたいのさ！　というか、何だか謎だらけだよね？　なんか、リング争奪戦で新たなキャラ、ニューボンゴレリングに似た何か……」

秋人

「俺はリングを持ってないけどな。というか、紫苑って記憶が無いのか？」

紫苑

「えー？　なんの話？　だって、ダメ吉くんも言ってたし」

綱吉

「あ、あのさ、なに？　ダメ吉って……ダメツナならたくさん聞いたけど」

???

「それより、あたしの名前ずっと“???”なの？」

綱吉

「無視された」

秋人

「まぁ、まだリング争奪戦には時間があるからな」

紫苑

「原作沿いじゃないよねー」

秋人
「ツッコミ無用」

紫苑
「プリーモって感じないよね」

秋人
「俺はプリーモじゃないから」

紫苑
「見た目、完全にジョットなんだけど…」

秋人
「結局オリジナルだから。レプリカみたいなもんだし、秋人という別物の器だからな」

綱吉
「なんか、秋人兄さんにも無視された」

紫苑
「ごめんね、ダメ吉くん」

綱吉
「また!!」

紫苑
「綱吉」

綱吉
「！？」

？？？
「やーい、顔が赤いですわ！」

綱吉
「うっ、うるさいな」

紫苑
「綱吉は笹川さんが好きなんだろぃ」

綱吉
「なっ、し、紫苑ちゃん！！」

秋人
「とにかく、今回の小休止は終わりです」

紫苑
「こんな、小さな物語のカケラを見てくれてありがとうございました！」

？？？
「ありがとうですわ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2156o/

運命の女神

2010年10月12日22時34分発行